

昨年末、 3大学と相次いで 国際交流協定を締結



韓国の木浦大学との提携調印式。
左は同大の鄭教授、
右は本学の小林素文学長

U 大学

本学は昨年、韓国の木浦(モッポ)大学、マレーシアのマレーシア科学大学、ドイツのハンブルグ大学との国際交流協定を締結しました。

韓国の木浦大学は、韓国南海岸の港町木浦に位置する1946年設立の国立大学で、学部9千人、大学院800人の総合大学です。文学部の小倉教授が、この数年、同大学大学院で集中講義をされていた関係で、今回の交流協定に到りました。昨年12月21日、木浦大学総長の名代として同大学大学院長の鄭教授が総長署名済みの協定書を持参し本学を訪

秋のオープンキャンパス 開催

U 大学



長久手キャンパス

11月13日(日)、秋のオープンキャンパスが開催されました。本学を志望する受験生を対象に愛知淑徳大学をより理解してもらうために、春、夏、秋に開催しています。長久手キャンパスと星が丘キャンパスをあわせて、12333人の来場者を迎えることができました。東海4県はもちろんのこと北陸地方や、北は群馬県や千葉県、南は広島県や徳島県まで、全国から多くの参加者があり、本学への関心の高さが伺えました。また、高校生1年生の参加者もあり、はやくから進路について真剣に考えている様子が見られました。

間、小林学長が調印して国際交流協定締結の運びとなりました。

マレーシア科学大学は風光明媚なペナン島に位置する国立大学で、24学部14教育センター、学部大学院併せて2万人を擁する総合大学です。ビジネス学部の石橋教授が同大学大学院生の指導をされていた縁で今回の交流協定となり、昨年10月に郵送で調印がなされました。

ドイツのハンブルグ大学は、ドイツ第2の都市にある4万人の学生を有する国立大学で、1919年の設立。医療福祉学部の宮田教授の母校ということで協定を結ぶことになりました。マンモス大学のため、国際交流協定はすべて同大学のアジア・アフリカ研究所との間で行われることになっており、昨年10月、同研究所長と本学小林学長との間で郵送で国際交流協定が調印されました。

マレーシア科学大学とハンブルグ大学への留学生は、各大学で英語の講義を受けることになりました。

教員と話ができる最後のオープンキャンパスということもあり、試験を目前に控えた受験生は、各学科・専攻個別相談コーナーや入試個別相談コーナーに長い列を作り、熱心に相談をし、全体説明会では、公募制推薦入試(自己推薦型)を希望する受験生が、小論文や面接のポイントなどについて真剣に聞き入っていました。また、全学部で支援している英語、中国語、韓国語、朝鮮語の言語活用科目や、コンピュータ活用科目の模擬授業も開催され、学生気分を体感していただきました。

文化創造学部と 現代社会学部 主催で 2講演会

U 大学

●平成17年度第1回文化創造フォーラムが星が丘キャンパス25A教室にて12月13日に開催されました。文化創造学部の発足以来、毎年行われている催しで、作家、映画監督、ミュージシャンなどをお招きして、文化創造学部の研究教育活動を学内外に紹介する催しとなっています。

今回の講師は小説「告白」で谷崎潤一郎賞を受賞された作家の町田康さん。今最も注目される小説家の初の講演会ということもあり、学外からも大勢来場者



荒川洋治教授が 萩原朔太郎賞を受賞

U 大学



文化創造学部教授で現代詩作家の荒川洋治先生が、昨年5月に発行された詩集「心理」(みすず書房)で、優れた現代詩を対象とした第13回萩原朔太郎賞を受賞されました。作品は郵便番号を主人公として、現実のできごとや人物が時空を隔てて交錯するという斬新な手法が好評を得たものです。

荒川教授はこれまで詩集「水沢」で第26回H氏賞、「渡世」で第28回高見順賞、「空中の茱萸(ぐみ)」で第51回読売文学賞と、現代詩の主要な賞を次々受賞。またエッセイ「忘れられる過去」で第20回講談社エッセイ賞受賞と、エッセイスト、そして文芸評論家としても活躍中です。

がありました。「告白」の朗読はミュージシャンでもある町田氏ならではの表情豊かなものでした。本学研究科の教授でもある映画監督の若松孝二氏との対談では、自らの創作観を明晰に語って下さいました。

さらに来場者からの矢継ぎ早の質問にもとても丁寧に答えて下さり、充実した90分でした。



国立民族学博物館
名誉教授 石毛直道氏

●12月14日(水)に食文化の研究でおられる石毛直道氏に「食文化とエスニティー」というタイトルで講演をしていただきました。

(表現文化専攻 角田達朗)

「同じ民族でも、集団ごとに言葉や食事の感覚が違い、集団の中でも少しずつ感覚は違っており、民族が違えば、さらに違ってくるが、それぞれの集団の中で同じ文化を感じ、共食をしていくことで理解していくことができると思っただ。しかし、それぞれの集団にはタブーが存在し、違う集団からは理解されにくいこともあると知った。しかし、タブーを守ることは非常に大事なことで、集団の中のつながりは、タブーを守ることでも強くなると思っただ。違う集団のタブーを理解し、その文化にふれ合うことで集団同士が歩みよることができ、自分の集団の考え方だけに留まらない、より広い世界を知ることができると思っただ。」(現代社会学部 藤井麻湖)

3年の浅野早紀さんが 弁論大会で第1位に



豊明市の星城高校で開催

昨年11月、愛知県私学協会主催の「第53回県私学弁論大会」で3年生の浅野早紀さんが中学の部1位の私学協会会長賞と県知事賞を受賞しました。

県内の私学の中学生15人と高校生29人が熱弁を振るう中、浅野さんは「嫌いの二文字」という題で出場。小学生時代の友人とのつきあいから学んだ、人を見



篠弘教授が 旭日小綬章を受く



文化創造学部の篠弘教授が、平成17年度の秋の叙勲で旭日小綬章を受賞。昨年11月、国立劇場での授賞式の後、皇居で天皇陛下に拝謁されました。

教授は戦時中、学童疎開先で石川啄木に親しんだのをきっかけ

に短歌を志し、大学在学中に歌誌「まひる野」に参加、土岐善磨らに師事しました。組織の中の生き方、いかに自分を守りながら時代を見めるかなどをテーマにして、社会性あふれる作品を発表し、1995年には歌集「至福の旅び

と」で第29回回空賞を受賞されています。

また、現代歌人協会理事長、日本現代詩歌文学館長などを務め、歌壇のリーダーとして短歌の発展にも貢献。短歌史の研究・評論の分野でも有名で、毎日新聞の毎日歌壇の選者を務めています。さらに今年からは歌会始の選者にも選ばれています。

篠教授は、「師の土岐善磨の言葉を守り、短歌が社会的な広がりを持つようにと仕事をしてみました。それが認められ、短歌の隆盛のためにも嬉しいことです」と話しています。現在は本学の学部で「日本文化論」を教えるほか、エクステンションセンターで「現代短歌論と実作指導」を担当し、学外の社会人にも指導しています。

かけで判断するのではなく、内面を知った上で評価するべきだという主張を静かに訴えました。

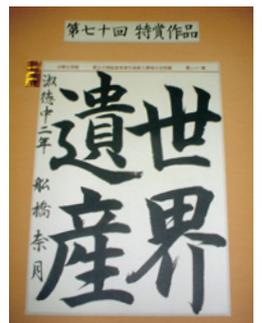
浅野さんはもともと人前で話すのは嫌いではなく、昨年5月のオープンスクールでは3年生を代表して在校生スピーチをし、父母の一人から感動したというハガキをもらったほど。今回はそれを知った先生から白羽の矢を立てられての出場で、大会の2・3週間前からは授業後にイントネーションなどの特訓を受けました。

「審査員の先生に自分が考えていることが伝わって1位に選ばれた自信ができました。自分も知らなかった能力、素質を、先生たちが気付かせてくれたのは嬉しいです。機会があればまた出てみたいです」

ね（浅野さん）。

2年の船橋奈月さんが 書道で県知事賞受賞

飛鳥井千砂さんが 第18回「小説すばる」 新人賞を受賞



小野道風記念館（春日井市）に展示された船橋さんの作品



飛鳥井千砂さん（本名）は、文学部国文学科を平成14年3月に卒業。初めて書いた小説「はるがいたら」（357枚）で、大きな賞を射止めた（副賞100万円）。

集英社が主催するこの賞は、女性のエンタテインメント小説の登竜門としても有名だが、これまでに花村萬月、篠田節子、佐藤賢一、村山由佳、池永陽など、芥川賞・直木賞の受賞者や現代の人気作家を数多く輩出している。応募数1156編中から、阿刀田高、五木

平安時代の書道家、小野道風の生地とされる春日井市とその周辺では昔から書道が盛んで、小野道風公遺徳顕彰会主催による小中学生を対象にした「県下児童・生徒席上揮毫大会」は昨年10月70回の節目を迎えました。

会場の小野小学校で学年ごとの課題に挑戦したのは、85小中学校から選ばれた765人。その中で本校2年の船橋奈月さんが見事、



寛之、井上ひさし、北方謙三、宮部みゆきの選考委員の一致した評価により、ただ1編が選ばれた。五木寛之は「この作者の感性は、まぎれもなく本物の小説家のそれであると思う。大成するとしたら、この人かもしれない」と激賞している。

文学部では、1月に飛鳥井さんを招いて講演会を開催した。受賞作は、1月5日に集英社より単行本として刊行されている。

（国文学科 久保朝孝）

最高位の県知事賞に選ばれました。

船橋さんは小学校3年生から書道塾に通い始め、この大会には5回出場。前回は上から2番目の特別賞を受け、今回は念願の最高位です。

課題（中2は「世界遺産」）は5月に出されますが、「私はバツと見て書けないので、半年間、何度も何度も練習し、大会の1か月前には塾で集中的に練習しました。しかし当日は「納得のいく字が書けなかったのが、だめかと思いましたが。受賞の知らせを聞いたときは驚きました」とのです。

「書道は先生ごとに手本も書き方も違って、いろんな良さがあるのが面白い。やればやるほど、奥が深いです。いずれは師範を取りたいと思っています」と、書道の魅力について話してくれました。